

第三幕

登場人物…

ロビン

ビートル（仕立て屋）

オウル（墓堀り）

ルック（牧師）

カイト（棺運び）

トラッシュ（聖歌隊）

ブルファイ（鐘撞き）

道端の木に動物達が集って談笑している。

ちゅんちゅん、ぴーちくぱーちく、ほうほう、etc…。

遠くから極々微かな泣き声がフェードイン。

目の良いカイトが何かに気付く。

カイト 「おや、あれは」

ロビンが泣きながらとぼとぼと歩いて来る。

零れる涙を両手でぐしぐしと拭きながらしゃくり上げて。

ロビン 「つく、ひつく」

他の動物達もロビンに気付きざわめき始める。

トラッシュ 「どうしたの、カイト？

あれは…ネズの木の家の方やじゃない」

ルック 「本当だ、ロビン坊やじゃないですか」

ブルファイ 「ウサギみたいにお目目を腫らして泣いてるわ」

ビートル 「まあブルファイ、それは本当？ 可哀想に…」

オウル（鼻）は一人だけ乗り遅れて目をこすっている。

欠伸混じりに、常に寝不足のようにだるそうな口調。

低音でゆったりと、達観したような超越したような、

童話の登場人物とはまた違った浮世離れ感。

オウル 「あふあ。こんな真昼から何をめそめそしてるんだか。

この陽射し、絶好の昼寝日和だっというのに」
次の台詞の間だけBGMや周囲のガヤをしぼって、
リスナーに語りかけるように。

オウル

「まあ、もつとも…：夢の中では夢も見れない。
眠気も覚めない。いつまで経っても私は眠い。

♪インソムニア」

♪はついているが平坦にぼそりと。

周囲はこの三行は完全に無視して会話を続ける。

聞こえていない扱い。

ブルファイ

「オウルの兄さん、それは兄さんが夜行性だからよ。

ロビン坊やは人の子で。

昼間は元気に遊び回っているものでしょ。

一緒にしちやダーメ」

オウル

「ほう、そういうものか。

言われてみればそういうものだったような気もする。

しかし、それならそれでこんな真昼に

泣いているのもいったい何があったやら」

オウルの『ほう』は鳴き声とかけている。

夜とは違っていまいち本調子ではない。

ぱたぱたと動物達がロビンの元へ飛び立っていく。

オウルも少し遅れて重たい腰を上げる。

何羽かがロビンの肩に止まり、

羽根でそっと涙を拭ってやりながら。

ルック

「これ、ジュニパー・ロビン。

どうして泣いているのです」

ロビン

「…泣いてなんか、ない。

ちよっと目が、痛いだけなんだ」

嗚咽を喉の奥に押し込みながら、強がる。

トラッシュユ

「しよっぱい涙は美味しくないわよ。

蜜の味がするのなら、

幾らでも飲んであげられるんだけどね」

動物達は訳知り顔、事情をよく知っている様子で。

ビートル 「またママにいじめられたの？」

ロビン 「違う、違うよ、そんなじゃないさ。」

「そんなじゃないって事にしといて。」

「…ママは僕の事、嫌いみたいだけど。」

「それだとマルレーンが泣いちゃうから。」

「マルレーンは僕の事もママの事も好きだから。」

「仲が悪いとすごく悲しいらしいんだ」

カイト 「妹のためなら我慢するっていうのか、お前は。」

妹思いは良い事だが。

「そんな事じゃお前の人生、先が思いやられるな」

ブルファイ 「あんたのママは我俣よ。」

「あんたは嫌い、でもマルレーンの事はだあい好き。」

「だったら、大好きなマルレーンのために」

「ママの方が我慢すりゃ良いじゃない、ねえ」

オウル 「可愛い可愛い実の娘と。前の女が残した息子。」

「我が子可愛さは生き物らしさ。」

「至極残念な事だが、至極当然な事でもあるな。」

「それで、何があったんだい」

「落ち着いたロビンが深刻な面持ちで話し始める。」

ロビン 「台所から、お皿とお匙がなくなっただ」

ルック 「お皿とお匙…ドイツシユにスプーンですか」

ビートル 「それならルック、これはきつと駆け落ちね」

ロビン 「駆け落ち？」

トラッシュ 「そういえば、昨日は確か満月…。」

「誰か牝牛が月を飛び越すのを見ていない？」

カイト 「それなら見たぞ。俺がこの目でしかと見た」

ロビン 「満月だから、お皿とお匙は消えちゃったの？」

ロビンはあまり要領を得ていない様子。

マザー・グースの歌についてほとんど知らない反応。

オウル 「そーいや、昨夜はフィドルの音色が聞こえてたね。

穏やかで、伸びやかな、良い心地の音だった」

この音色の形容はBGMに合わせて変更可能。

音色を思い出してうっとりするように。

オウルは夜に似合う穏やかな音楽が好き。

フィドルという言葉に顔を見合わせると、

鳥達が第二幕と同じメロディをとって歌い出す。

トラッシュユ 「♪猫はフィドルを弾き鳴らし、」

カイト 「♪牝牛は月を飛び越して、」

ブルファイ 「♪それ見て小犬は大笑い、」

ルック 「♪そうしてディッシュとスプーンは、」

トラッシュユ 「♪逃げ出し、駆け出し、駆け落ちよ」

自慢の声でドヤ、という感じで。

歌っていない面々は小さく歓声を上げてぱちぱちと拍手。

ロビンの手前、わぁっと沸くのではなく控え目に。

なお、歌っていないのはビートルとオウル。

ビートルは虫なので歌えない。

オウルは面倒臭がりだし、昼間は本調子ではない。

ビートル 「皆さん流石にお歌がお上手。」

中でもやっぱりトラッシュユの歌声は格別ね」

『トラッシュユ』はやや名前としては語呂が悪いので、

『トラッシュユ』に近い発音を推奨。

トラッシュユ 「それほどでも。へまんざらでもない微笑」

と、ごめんなさい。坊やが置いてけぼりみたい」

おずおずと、不安げに切り出すロビン。

ロビン 「お皿とお匙はもう戻って来ないの？」

オウル 「きつと、戻らないだろうね。」

駆け落ちはお出かけとは違うんだ」

少し俯瞰するように断言するオウル、

メタ視点を持っている雰囲気が出始めてくる。

ロビン 「そう……なんだ。」

僕、お皿とお匙に嫌われちゃったのかな。

だったら、何だか……寂しいな」

オウルに対してもう、めっ、と叱るように。

ビートル 「そんな言い方は可哀想よ」

カイト 「Shh, ビートル。」

可哀想と言う方が可哀想じゃないか？

ま、どっちにしたって」

『オウル』を少し強調して呼ぶ。

ルック 「オウル、君の言葉はどうにもしばしば」

ルツ・カイ 「残酷だ」

二人揃ってオウルにびしりと指差し。

ルックの『残酷だ』は『仕方ない奴め』という風に。

カイトの『残酷だ』は純粋に批難するように。

誰も理解者はいないという様子でやれやれと独り言。

オウル 「まったく、誰も解っちゃいない。」

いや、解ってはいるのも若干いるみたいだけど。

……この世界は。

マザー・グースの世界っていうのは、

ただただ残酷なのが取り得^{とえ}だろうに」

『残酷』の部分は微かに鼻で笑うように。

泰然としたキャラクターなので露骨にはならない事。

ロビン 「残酷？」

おや、と含み笑いをするオウル。

オウル 「そう、物語は残酷かとびきり甘いかどちらかさ。

ロビン 「ことこの世界においては甘さなんて皆無に等しい」

「でも、女の子はお砂糖でできてるって言うよ？」

♪ What Are Little Girls
made of?
メイド オブ

かたつむり

蛙に蝸牛、仔犬の尻尾でできているのが男の子。
砂糖にスパイス、それから素敵な物何もかもで
できているのが女の子。

「……でしょ？ ママがマルレーンにそう言ってた」
ママの話をする時だけ少し表情を曇らせるロビン。
首を竦めて苦い顔をするオウル、吐き捨てるように。

オウル

「よしてくれ、そんな世迷言^{よまいごと}。」

くだらないにも程がある」

気圧されて戸惑うロビン。

ロビン

「ご、ごめん」

ブルフィ

「ちよっと、オウルがいじめてどうするの！

……らしくないじゃない、どうしたのよ」

間に入ってロビンを庇い、オウルを睨むブルフィ。

オウル

「別にいじめちゃいないだろ。」

嗚呼、解った。悪かったよ。

〈はーと長く息を吸い込んでから、短く溜息〉

私だって何も意地悪をしたい訳じゃない。

こんな事を言いたくなるくらい、

世界は狂ってるって、そう」

何処か遠くを見るように一息置いて、小声になって。

オウル

「……そう言いたかっただけなのかもね」

トラッシュ

「オウル？ 何をぶつぶつ言っているの？」

オウル

「いいや、何でもなし。ただの寝言だ。」

私は眠い」

ぷいとそっぽを向き近くの木に凭れかかる。

しばらく蚊帳の外を決め込むオウル。

ビートルは心配そうに。

ビートル

「オウル……」

カイト

「何だよ、変な奴」

ルック

「ふむ……」

思案げに声を洩らした後、

ルック

「ともかく話を戻しましょう。」

「ドイツシユとスプーンの事です。」

「駆け落ちしてしまったものは仕方ありません。」

「悲しいかもしれませんが諦めなさい、ロビン坊や」

ロビン

「でも、戻って来ないなんて、僕困るんだ。」

「このままじゃご飯が食べれない」

ルック

「それはまた、何故？」

ロビン

「ママが、言うんだ。」

「お皿がないならご飯はお鍋から食べなさいって、

お匙がないならご飯は手で食べなさいって。」

「パパの大好物がシチューだから。」

「僕ん家のご飯は毎日シチュー。」

「お皿とお匙がなくちゃ駄目なんだよ」

ビートル

「惨い事を言うママね。」

「そんな事したら、貴方のお手では大火傷」

「ここからロビンの長語り。」

「合間に動物達の相槌が挟まるイメージでひそひそと。」

ロビン

「朝起きたらもうお皿もお匙もなくなってたのに。」

「ママは僕が失くしたって言うんだ。」

「僕がつまみ食いをするために、夜中にこっそり

起きてきてお皿とお匙を使ったんだって」

トラッシュユ

「呆れた想像力ね」

ブルフィ

「自分が坊やにちゃんと食べさせてないって

自覚があるからこんな妄想ができるのよ」

ロビン

「シヨークをインメツするために、汚したお皿と

お匙を何処かへ捨てて来たんでしょって。」

「…僕、そんな事してない！」

「お腹はぐうぐう鳴いたけど、ちゃんとベッドで

ウイリーが来るのを待ってたんだから。」

なのにウイリーは中々来ないし」

ルック 「待っている子がいるというのに」

カイト 「しょうのない奴だな、寄り道ウイリー」

ロビン 「マルレーンが羨ましい。」

ママから夜食に美味しそうなリンゴももらえるし。

お布団はガチョウの羽根でふかふかで」

ガチョウという単語に反応、オウルがロビンに向き直る。

寝起きのような低い声のまま。

オウル 「ロビン、悪い事は言わない。そろそろ家うちにお帰り。

ただでさえ、君の名前は不吉な名前。

…：もう、とうに手遅れかもしれないが」

一行目はシリアスに重く、二行目でトーンを下げ、

三行目は完璧に他人に聞かせるつもりのない台詞。

ロビン 「え？」

動物達も訳が解らないというようにオウルを見る。

ブルファイ 「それは一体何のお話？ 全然筋が繋がらないわ」

オウル 「そういう話だ。筋なんて端はなからありやしない」

トラッシュ 「訳が解らないわね」

カイト 「つまりは何だ、オウル。」

お前はロビンに腹を空かせてろって言うわけか。

帰っても飯なんざ食わせて貰えねえっていうのに」

オウル 「見付からないなら帰るしかあるまい。」

君らは何だ、

駆け落ちした二人が今更戻ってくるだけでも？

ロビンを家にも帰さない気か？」

ビートル 「誰もそうとは言ってないわよ、落ち着いて」

不満そうに唸る鳥達のガヤを無視して。

オウル 「さ、可愛いマルレーンが探しに来る前に。

帰って全部忘れなさい」

ロビン 「うん…：そうする」

不服ながらも見送る鳥達。
トラツシユ 「♪ Good-bye, Lovin', you」

『Lovin' you』はラヴィンの響きをロビンにかけて。

発音は正規の『ラヴィンニュー』よりも

若干『ロヴィンニュー』に寄せて。

ロビン 「ありがと、皆。じゃあ、またね」

ロビンが手を振って去っていく。

動物達もぱたぱた手を振り返す中、

オウルが腰を上げ立て掛けていたシヨベルを手取る。

動物達の輪から抜けようとすオウルを呼び止めて。

ルック 「どうしたんです、オウル。」

君の仕事道具の出番はまだでは？」

意外そうに眠たげだった目を少し見開いて。

オウル 「ほう」

この『ほう』も鳴き声とかけて。

オウル 「そう遠からず解るだろうさ。」

誰がロビンを殺すのだろうかね。

ほう、ほう、ほう」

最後の鳴き声は第二幕の冒頭等に挿入するSEと似せて。

むしろ、可能であれば梟の鳴き声のSEも

キャストさんをお願いしたく。

また、ここの『ほう』の響きは『Who』に寄せる。

『Who Killed Cock Robin』の伏線。

解説..

マザー・グースに登場する動物や無機物は全て擬人化。

擬人化といっても非常にアバウトな都合主義で、

擬人化体で墓を掘っていた次の場面で

鳥の姿になって飛んで行く事もできる。

また、死後の魂は古今東西問わずよく鳥に喩えられる。
登場する鳥達の中にも

実は既に死んでいる者がいるのかもしれない。

サブキャラクターについて…

トラッシュは聖歌の似合う綺麗な声でお願いします。

外見は目がぱっちりした小柄な美人。

茶、白、黒のコントラストがはっきりとした衣装。

ビートルは温和で真面目そうな淑女。

髪から衣装まで、全体に落ち着いた焦げ茶色で統一。

ルックは黒の燕尾服や神父服が似合う紳士。

肌は色白、顔以外は肌を出さずに黒づくめ。

カイトは活動的で颯爽としたイケメン。

空を滑空するハンターとしての鳶をイメージ。

ブルファイはぼちゃつとした子供っぽい娘さん。

黒髪にグレーの服、首元にピンクく赤の差し色。

画像検索等で元の動物を見て頂ければ解り易いかと。

オウルは色々種類がありますが、

ユーラシアワシミミズク辺りが格好良いでしょうか。

老人ではなく敢えて若い『森の賢者』でいきたいです。

演技上の注意…

マザー・グースの世界では歌が歌われる毎に

それに沿ったシナリオが展開されます。

同じ歌が繰り返し歌われれば、

その回数だけ全く同じ事が繰り返されます。

登場人物の大半は繰り返し返しの記憶がなく

何の違和感も感じずに同じシナリオを繰り返しますが、

オウルなど一部のキャラクターは

『同じ事が繰り返されている』事を知っています。